

銅玄 修平

-520-

3. 実験結果

表4は実験結果の一覧表を示したもので、同表より、 a/d の効果とクリープさせない供試体とさせた供試体の破壊荷重の比をみてみると、 a/d の大きさに無関係に両者の値はほぼ一致していると認められる。また、同表よりクリープレベルの効果について調べると、クリープレベルが大きくなるにつれて、破壊荷重が若干ながら小さくなってゆく傾向が認められる。図-2は供試体表面に発生したひびわれの発生状況を示したものの一例であって、これより a/d が1と5のものについては、クリープ変形に伴う新たなひびわれの発生は少ない。これに対して $a/d=2$ のものはクリープによるひびわれ発生も多く、従ってクリープによる影響を一番多く受けやすいとも考えられる。図-3, 4, 5は荷重-歪の関係について示したもので、NO.4を除けばクリープ変形のないRCはりと同様の変形性状を有する。

4. あとがき

今回、圧縮鉄筋の入っていない供試体について検討した結果、クリープがRCはりのせん断耐力に及ぼす影響はかなり小さいことが判明した。次回は圧縮鉄筋の効果について検討する。

表-4 実験結果一覧表

供試体	a/d	荷重-歪線図 (t)	せん断耐力 (t)	破壊形式*
NO.1	1		13.0	せん断圧縮
NO.2	1	14.0	4.0	〃
NO.3	2		6.0	〃
NO.4	2	5.0+6.0	3.5	〃
NO.5	3		3.0	斜り引張
NO.6	3	2.5		
NO.7	5		4.2	斜り引張
NO.8	5	2.1+2.5	3.9	〃
〇の効果を				
NO.4	2	5.0+6.0	3.5	せん断圧縮
NO.9	2	6.0	5.5	〃
NO.10	2	7.0	5.5	〃

*せん断圧縮:せん断圧縮破壊, 斜り引張:斜め引張破壊

